

舞洲スポーツアイランド活性化についての提言 ～人工島からスポーツアイランドへ～

大阪経済大学 相原ゼミ B

○ 永野 義和 柿谷 雄暉 吉田 光伸
 江渕 起史 井出 大貴 澤邊 智哉

1. 緒言

過去に大阪市は人工島「舞洲」にメイン会場を置き、2008年に世界初の海上オリンピック開催を目指してオリンピック招致を行った。しかし、課題の多さを露呈し開催地は北京に決定、大阪はあえなく最下位で落選するという結果に終わった。

この結果により、舞洲にはいくつかのスポーツ施設と広大な土地が残り、交通アクセスの悪さやショッピング施設がほとんどないことから長年「陸の孤島」と揶揄されていた。また、平日の施設稼働率の低さや指定管理業務代行料として年間2億円以上かかる経費も課題とされていた。

そこで、大阪市は土地や施設を民間に貸し出し、スポーツアイランドを再生する施策に転換した。既存の施設を活用できるメリットなどにプロスポーツチームが注目し、プロ野球の「オリックス・バファローズ」、サッカーJリーグの「セレッソ大阪」、バスケットボールBリーグの「大阪エヴェッサ」と3つのプロスポーツチームが舞洲に活動拠点を置くことが決定した。1つの人工島に3つのプロスポーツチームが集結するのは日本でも例がなく、舞洲は新時代のスポーツ拠点として再び注目を集めている。

2. 舞洲の現状

まず舞洲とは、大阪市臨海部の北港部に位置している建設残土や廃棄物により埋め立てられた人工島である。地区面積は220haで、舞洲全体の土地利用としては、西側がスポーツ・レクリエーションゾーン、東側が物流・環境ゾーンに分かれている。西側は、プロスポーツチームが拠点とするスポーツ施設はもちろん、テニスコートなどの施設や宿泊・レジャー施設、障がい者スポーツセンターなども立地しているため、利用者の様々なニーズに応えることができると言える。また、市中心部から車で約20分の距離にあり、近くにはUSJ(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)もあるため、立地は決して悪くない。

しかし、舞洲へ行く交通手段が車もしくはバスしかないことや、飲食店やコンビニ、病院、診療所、薬局のような生活利便施設がほとんど立地していないことなど、課題も多く残っているのが現状である。



図①大阪市 舞洲スポーツ振興事業より



図②同左 出典：大阪市

3. 舞洲の課題

- ・公共交通手段がバスしかなく、アクセスが非常に悪い。
- ・使用されていない土地が多くあり、土地の有効活用ができていない。
- ・プロスポーツチーム同士の協力したイベント開催が鍵。(インタビュー調査より)

大阪市交通局様へのインタビュー調査では、大きな収益が見込めるイベント開催時にはバスの増便が可能という話から、アクセスの悪さを解消するには集客力のあるイベントの開催が不可欠であると考えられる。さらに、継続的に集客可能なプロジェクトがあればアクセスの悪さをもっとも解消できる電車の開通の必要性を促すことができると仮定した。

4. 研究目的・方法

1つの人工島に3つのプロスポーツチームが集結しているのは日本でも例がない。我々はこれをチャンスと捉え、舞洲を新時代のスポーツ拠点にするべく活性化案を検討する。

インタビュー調査
 大阪市 交通局
 オリックス・バファローズ 広報部

5. 考察

我々はこれらの課題の中でも特に交通アクセスの悪さを早急に改善すべきと考えた。しかし、最も効果のある鉄道の延伸には膨大な費用や時間がかかるため、交通アクセスの悪さを一気に改善するのは現実的に難しいと予想した。そこで、我々は少しずつ段階を踏みつつ交通アクセスを改善すれば良いのではないかと考えた。ここでは、我々が考えた短・中・長期的な交通アクセス改善に向けた取り組み・考察を紹介する。

短期：バスの増便

大きな収益が見込めるイベント開催時に一時的にバスを増便する。

(例)プロスポーツの試合、高校野球の大会、音楽フェスなど

中期：連節バスの導入

連節バスとは、通常のバスの後ろに牽引するもう1つのバスを連結しているバスである。海外では、欧州諸国を中心に多くの国で導入されており、日本では千葉県や神奈川県、岐阜県などで導入されている。

メリット・・・効率的に大量輸送できる、運行回数の集約化が図られる

鉄道より敷設が低コスト、渋滞が解消できる

デメリット・・・警察や自治体との協議が必要、専用レーンが必要

購入コストが高い

長期：鉄道延伸、自動運転バスの導入(最終目標)

・鉄道を延伸することで半永久的に集客でき、市中心部から直接舞洲へ行くことが可能となる。しかし、延伸には膨大な費用と時間がかかる。

・自動運転バスを導入することで運転手の人件費を削減できる。しかし、導入には費用や法整備、事故のリスクなど問題点が多くある。

6. 提言

①コミュニティFMの活用

コミュニティFMとは、1992年に制度化された超短波放送用周波数を使用する放送で、最大出力は20Wだが放送エリア内外で電波干渉がない地域では特例として限度を上回る出力が認可されるケースがある。

舞洲全体にコミュニティFM放送をすることにより、試合の実況放送やルールがあまりわかっていない人向けに解説の放送をするなど「見るスポーツ」の要素だけでなく、「聞くスポーツ」として新たなスポーツの楽しみ方を提言する。各イベントの情報や、選手のインタビュー放送などでファンの興味を引く。また、プロスポーツ同士の情報共有にも貢献し、共同でのイベント企画に繋がりやすくなると推測される。さらに舞洲は周りを海に囲まれているため周囲への影響という面では舞洲の立地は適していると言える。

②ユニバーサル・スタジオ・ジャパンを巻き込んだ共同政策

アメリカのウォルト・ディズニーランドの例をもとにアミューズメントパークの中にスポーツ施設があるという形を目指す。

舞洲の周辺にはユニバーサル・スタジオ・ジャパンという大きな集客力がある商業施設がある。現在日本において最も勢いのあるアミューズメント施設の一つであり、若者を中心に大きな集客力を持っている。その集客力を舞洲で活用し、家族連れや無関心層にも興味を持ってもらえるような協同イベントを行い、スポーツとアミューズメントテーマパークの融合を図る。さらに舞洲に宿泊施設や商業施設を建

設することで顧客の長期滞在を促進し、相互的な経済効果を狙う。

③公道レースの実施

舞洲を利用した公道レースを開催。市街地で開催しようとするとう騒音や環境問題など障害が多くなってしまいが、舞洲では少ないことが考えられる。

また、レースもひとつのスポーツであり、それを舞洲で開催することにより聖地化を図る。

さらに、今後舞洲で日本初の公道レースが開催されるとなると当然メディアの注目が集まる。そこでスポンサーシップを利用し、企業の技術誇示・宣伝を兼ねた舞洲への送迎バス等、Win-Win の関係を作る。

7. 今後の展望

現在、大阪市は我々と同じように舞洲の3つのプロスポーツチームと協力してプロジェクトを検討したりするなど既に動き出している。だが、実現に向けてまだまだ課題は出てくることだろう。現に過去にもカジノ招致等様々な構想が挙がっていたが、結局どれも実現することはなかった。そして今、舞洲は大きな転機を迎えている。

さらに、来たる2020年には東京オリンピック・パラリンピックが控えている。今後、ますます国民のスポーツに対する意識・関心は高まっていくことは間違いないだろう。その中で課題を克服し生まれ変わった舞洲が発信源となり、大阪のスポーツ振興に貢献する姿を期待したい。

8. 参考文献・資料

大阪市舞洲スポーツ振興事業

<http://www.city.osaka.lg.jp/keizaisenryaku/page/0000376172.html> (閲覧日：10月5日)

J S B A 日本コミュニティ放送協会

<http://www.jcba.jp/community/>(閲覧日：10月5日)

平成25年度 大阪港スポーツアイランド施設事業報告書(閲覧日：10月5日)

<http://www.city.osaka.lg.jp/port/cmsfiles/contents/0000286/286252/supoaihoukoku.pdf>

健康・スポーツ産業分野での舞洲活用方策(閲覧日：10月5日)

<http://www.city.osaka.lg.jp/port/cmsfiles/contents/0000158/158601/042.pdf>

山口泰雄 スポーツボランティアへの招待 新しいスポーツ文化の可能性